國學院大學学術情報リポジトリ

「詠嘆」と対話・独話：源氏物語の助詞カナ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 宏太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000913

「詠嘆」と対話・独話
―源氏物語の助詞カナ―

富岡宏太

一　本稿の目的

中古和文には、「詠嘆[1]」の意味を持つとされる終助詞が現代語よりも多い。この「詠嘆」の意味と独話的な訳とは、しばしば密接な関係を持つものと考えられてきた。たとえば、助詞カナについて、辞典類には、次のようにある。

・詠嘆の意を表す。…だなあ。なあ。
（中田祝夫ほか編一九八三『古語大辞典』小学館、三八〇頁）

・感動・詠嘆の意を表す。…なあ。…であることよ。
（秋山虔・渡辺実編二〇〇五『三省堂詳説古語辞典』三四二頁）

・（感動・詠嘆を表し）…だなあ。…ものだなあ。…ことよ。
（中村幸弘編二〇〇七『ベネッセ全訳古語辞典改訂版』三六四頁）

すべての辞典において、カナは「感動・詠嘆」といった意味を持つとされており、独話的性格が強い文末形式「～なあ」「～ことよ」が、訳としてあてられている。

辞典に示された独話的な訳は、多くの場面において適切なものである。

(1)〔若紫〕《めでたき人かな》と見たまひて、……。

〈若紫、一六九・六〉

(1)は源氏を見た若紫の心内文で、「素晴らしい人だなあ」と訳される。このように、独話的にとらえられるカナの例は非常に多い。

一方、西田隆政（二〇一二、二〇一四）では、カナで終止する文（以下、カナ終止文と呼ぶ）にも、聞き手を意識した例（以下、対話的性格の強い例）が存在する事を指摘した。たとえば、以下のような例である。

(2)〔大輔命婦→源氏〕「いとかたはらいたきわざかな。物の音澄むべき夜の様にもはべらざめるに」

〈末摘花、二〇三・三〉

突然、末摘花のもとにやってきた源氏に対しての命婦の発話である。聞き手である源氏の行動に対して、本人に直接述べている点から、「たいそう困った事だなあ」のように、独話としては訳しにくい。実際、参照した注釈書類では、

・「～だこと・ですこと」などの文末形式で終止させ、対話的なのか独話的なのかを明確にしない訳（【集成】【今泉訳】【新大系】）

・「～でございます」と、聞き手へ説明する訳（【大系】【玉上評釈】【鑑賞と基礎知識】）

・「～ではありませんか」と相手に訴えかける訳（【新編全集】）

がなされており、「～なあ」「～ことよ」のように、独話的である事を明示した訳は見られない。

西田は、このような対話的性格の強い例がカナ終止文に散見され、特にコトカナで終止した文に多い事を指摘したうえで、カナを単に「詠嘆」の意味を持つ終助詞とする事に対して、再考の必要性を述べている。それをうけて本稿では、次の二つのレベルに分けて、二点を明らかにする。

・個別の文脈から得られる用法の問題

対話的性格の強い例は、カナ終止文の構文にかか

わらず現れるのか、それともコトカナという文末形式の場合のみに現れるのか。

・カナという助詞自体が持つ意味の問題

カナが「詠嘆」の意味を持つ事と、対話的性格の強い例も独話的性格の強い例も存在する事とは、どのような関係にあるのか。

調査対象は、源氏物語（本文は池田亀鑑『源氏物語大成校異篇』中央公論社）の散文の例、五八一例である。表記は私に改めた。引用文中の〔　〕は話し手と聞き手とを、（　）は補足説明を、〈　〉は巻名、使用テキストの頁、行数を示すものとして筆者が付した。

二　カナ終止文の対話的性格の強さ（用法の問題）

二・一　カナ終止文における聞き手の有無

カナ終止文の対話的性格の強さをはかるための前提として、まず、カナがどのような文種で使用されるかについて見ていく。ここでの基準は、発話文・消息文か否かという点である。特に独話文の場合、心内文と区別がつかないケースも見られるが、ここでは「　」で括られているかどうかを基準として分類を行った。[2] 結果を［表一］に挙げる。

［表一］

	体言	活用語	合計
発話・消息	一四七	一六二	三〇九
それ以外	一三三	一三九	二七二
合計	二八〇	三〇一	五八一

［表一］を見ると、「体言カナ」「活用語カナ」の別にかかわらず、発話文・消息文の例が半数以上にのぼっている事がわかる。では、この中に対話的性格の強い例はどのくらい見られるのだろうか。二・二で検討する。

二・二　対話的なカナ終止文

ここでは、発話・消息文として認定された三〇九例を対象に、対話的性格の強い例がどのくらい見られるかについて言及していく。これらの例には独話文も含まれ、また、

会話文のように見えても、対話的性格の強い例とは言い切れない例も含まれるためである。

独話文の例としては、以下の例を挙げる事ができる。

(3)〔八宮〕「笛をいとをかしうも吹き通したなるかな。誰ならん。昔の六条の院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか、これは澄みのぼりて、ことことしき気の添ひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など、ひとりごちおはす。〈椎本、一五四八・七〉

(3)では、聞き手となる人物がその場に存在しない。その事は、地の文に用いられた「ひとりごつ」という語からも明らかである。したがって、確実に独話文であると判定でき、対話的性格の強さを考慮する必要はない。

一方、会話文のように見えても、聞き手を意識した対話的性格の強い例かどうか、判定しがたい例も見られる。

(4)〔女房→女房〕「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にもあふものなりけり」〈末摘花、二一八・一四〉

(4)では、カナ終止文を皮切りに、末摘花邸の女房同士の会話が始まる。その点で、会話文と考える事も可能である。しかし「さも寒き年かな」という言葉そのものが、聞き手に向けられたものかどうかは、明確でない。話し手の意識としては、独話的にカナ終止文を使用したあとで聞き手に説明した、という可能性も考えられるのである。よって、対話的性格が強いかどうかははっきりしない。このような例を除外するため、より具体的に対話的性格の強さを規定する基準を考える必要がある。

対話的性格の強さについて、西田隆政（二〇一二）は場面の解釈に基づき、最終的には「～だなあ」という訳が適切かどうかという点をもって分類している。つまり、個々の事例に即して、対話的か独話的かの説明が施されており、全体を一定の基準で分類したものではない。カナに対話的性格の強い例が存在する事を証明するには、厳密で客観的な基準を設ける必要がある。そこで本稿では、次の二点を

基準とする。

① 同一発話場にいる聞き手の発話内容や行動に対して、応答・反応している場合

② 同一発話内で聞き手への問いかけの表現、命令・依頼表現といった行為要求表現が、カナ終止文の前に使用されている場合

このうち①は、西田（二〇一二）が対話的性格の強いカナ終止文の特徴の一つとして挙げているものであり、②は本稿独自のものである。ではなぜ①②が根拠として認められるのか、説明を加えておこう。

まず①は、聞き手本人の発話内容や行動内容に言及している点が重要である。たとえば、

(5)（前提ナシニ）〔太郎→次郎〕「いい天気だなあ」

と述べた場合は、話し手である太郎が、聞き手である次郎について意識しているかは判然としない。しかしたとえば、

(6)（次郎カラ次郎ノ案ヲ聞イテ）〔太郎→次郎〕「いいアイディアだなあ」

という発話では、話し手の太郎が聞き手の次郎の発話内容について言及している。聞き手の発話内容に踏み込み、しかもそれに対して評価を行う場面において、聞き手に伝わる事を想定しないというのは考えにくい。よって、仮に聞き手が独話として解釈したとしても、発話者自身は聞き手を意識し、聞き手との関係に合わせた話し方をするものと考えられる。以上の事から①は、聞き手を意識した対話的性格の強い例の根拠であると考えられるのである。

次に②である。問いかけの表現、命令・依頼表現といった行為要求表現は、聞き手になんらかの反応を求めるものである。求められるものは、問いかけなら問に対する答えであり、行為要求表現なら、行為の実行である。聞き手の反応を要求し、注意をひきつけている以上、直後の発話で話し手が聞き手を意識していないとは考えにくい。[3]

以上の理由から、①②のいずれかに該当するものは、対

話的性格の強いカナ終止文の例と認める。この基準に従えば、(4)は聞き手の行為に言及しているわけでもなく、また、問いかけや命令・依頼表現が使用されているわけでもないから、条件を満たしていない事になる。

では、①②に該当するものを見ていこう。①の例は、「聞き手の発話の直接引用」・「聞き手の発話内容への評価」・「聞き手の行為への評価」という四種のいずれかに該当すると考えられる。

【「聞き手の発話の直接引用」の例】

(7)〔花散里→夕霧〕「……。世の常の事なれど、三条の姫君の思さむ事こそ、いとほしけれ。のどやかにならひたまうて」と聞こえたまへば、〔夕霧→花散里〕「らうたげにものたまはせなす姫君かな。いと鬼々しうはべるさがなものを」〈夕霧、一三六一・一三〉

花散里と夕霧との会話場面である。直前の発話で花散里が、夕霧の妻である雲居雁を「三条の姫君」と呼んだ事に対する反応である。その部分を直接引用しながら応答しているのであるから、独話的とは考えにくい。

【「聞き手の発話内容への評価」の例】

(8)……、まほにはあらねど、〔源氏→紫上〕「物越しにはつかなりつる（朧月夜トノ）対面なむ、残りある心地する。いかで人の目咎めあるまじくもて隠して、今一度も」と語らひきこえたまふ。うち笑ひて、〔紫上→源氏〕「今めかしくもなりかへる御有様かな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」〈若菜上、一〇七四・六〉

源氏が「尚侍（＝朧月夜）にもう一目だけでも会いたい」と冗談めかして言った事に対する紫の上の応答である。若々しい状態に戻ったふるまいだと戒めているわけである。前掲の(7)とは異なり、聞き手の発話を直接引用しているわけではない。しかし、聞き手である源氏自身の発話内容について評価を下している。したがって、対話的性格の強い例であると考えられる。

【「聞き手の発話内容における第三者への評価」の例】

(9)〔若紫→源氏〕「なやらふとて、犬君がこれ（＝人形）をこぼちはべりにければ、繕ひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。〔源氏→若紫〕「げにいと心なき人のしわざにもはべるなるかな。今繕はせはべらむ。今日はこと忌みして、な泣いたまひそ」〈紅葉賀、二四四・三〉

犬君に人形を壊されたという若紫の訴えに対しての源氏の発話冒頭にカナ終止文が用いられている。(8)とは異なり、評価されるのは、聞き手の若紫本人ではなく犬君の行為だが、聞き手の発話内容に応じているという点では、(8)と同様である。よってこの発話を、聞き手に向けられたものではないと考えるのは困難である。聞き手敬語「はべり」がカナ終止文に使用されている点も、傍証にはなるであろう。

【「聞き手の行為への評価」の例】

(10)（浮舟ガ薫ニ）心やすくしも対面したまはぬを、これかれ（＝乳母・女房達ガ）押し出でたり。遣戸といふ物さして、いささか開けたれば、（ソノ隙間カラ）〔薫→浮舟〕「飛騨の工匠も恨めしき隔かな。かかるものの外には、まだ居ならはず」〈東屋、一八四六・一〉

この例は、聞き手の行為への評価の例である。雨の降る夜、薫は浮舟のもとを訪れるが、建物の中に入れてもらえず、外で待たされていた。しばらくして、浮舟が出てくるものの、なおも遣戸を立てた状態で対応している事について憂いているのである。このような聞き手の行動に対する応答は、「～なあ」と訳す事はできても、聞き手に向けられたものと解するべきであろう。以上の四種が①の例として認められるものである。

②に該当するのは、「聞き手への問いかけの表現がカナ終止文の前に置かれる場合」「聞き手への行為要求の表現がカナ終止文の前に置かれる場合」の二種である。以下に例を挙げる。

【聞き手への問いかけの表現がカナ終止文の前にある場合】

⑾〔源氏→右近〕「さてこの若やかに結ぼほれたるは誰がぞ。いといたう書いたる気色かな」〈胡蝶、七九一・一一〉

柏木から玉鬘への消息を見つけた源氏が、右近に説明を求めている場面である。まず、消息について、「誰からのものか」を質問したうえで、カナ終止文を用いている。質問をして、聞き手の注意をひきつけているのであるから、対話的性格の強い例である。

【聞き手への行為要求の表現がカナ終止文の前にある場合】

⑿〔桐壺更衣母→靫負命婦〕「暮れ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかでたまへ。年ごろ、うれしく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、かへすがへすつれなき命にもはべるかな。……」〈桐壺、一四・三〉

靫負命婦が桐壺更衣の母のもとを訪れる場面である。「私的な場合にも訪れてください」と行為要求を行った直後に、カナ終止文がある。行為要求の表現においては、その内容を確実に伝達しなければならないはずである。したがってここでも、聞き手の注意をひきつけていると考えられる。その直後の一文が、聞き手を意識しない独話的性格の強いものとは考えにくい。このカナ終止文にも「はべり」が使用されており、傍証となる。以上の二種が、②に該当するものである。

なお、②の例の中には、次の⒀のように、カナ終止文の直前に問いかけ、直後に行為要求の文が出現する例がある。

⒀〔右大臣→朧月夜〕「かれ（＝男物の帯）は誰がぞ。気色異なる物の様かな。たまへ。それ取りて、誰がぞと見はべらむ」〈賢木、三七六・八〉

源氏と朧月夜との密会が、右大臣によって露見する場面である。右大臣はまず、その帯は誰のものかと問いかけ、カ

ナ終止文を用いた後、よこしなさいと要求している。このような発話において、間に挟まれたカナ終止文のみが独話的性格の強いものと考えるのは難しく、明らかに聞き手に向けられたものと考えられるであろう。

以上のように、①②のどちらかに該当する例を、聞き手を意識した例として認めると、カナ終止文における発話文の例、三〇九例中、一二一例は、対話的性格が強い例として認定できる。このうち二〇例は西田のいうコトカナの例だが、それを除いてもやはり一〇一例見られる事になる。もちろん、残りの一八八例も、すべてが確実に独話的性格の強い例と判定できるわけではない。一二一例というのは、あくまで本稿の基準によって、厳密に定義した場合の数値である。

以上のように考えると、対話的性格の強さは、構文によって異なるものではないと考えられる。

三　「詠嘆」と対話的性格の関係（意味の問題）

前節の調査から、「聞き手への伝達を意識した」例が見られるという西田隆政（二〇一二、二〇一四）の指摘は、カナ終止文の構文にかかわらない問題として捉えられる事がわかった。

しかし、以下の点は解決すべき問題として残っている。

カナが「詠嘆」の意味を持つ事と、対話的性格の強い例も独話的性格の強い例も存在する事とは、どのような関係にあるのか。

本節では、この問題を考えていく事にする。

三・一　「詠嘆」とは何か

この問題を考えるために、「詠嘆」とは何かという点から考えてみよう。西田隆政（二〇一二、二〇一四）では、「詠嘆」の定義を小松光三（二〇〇一）に従っている。小松による「詠嘆」の定義は、次のようなものである。

> 情意の一つ。対象に対する深い認識の後に生じる情意をいう。〈八五頁〉

また、大鹿薫久（二〇一四）では、「詠嘆」を次のように定義する。

……、驚き，喜び，悲しみ，嘆きなどを総じて事物，事態に対する情感の表現について「詠嘆」という用語を用いるのである。ただし，詠嘆，感動といっても，日常語とは異なり，発見の情動や不快・嫌悪・落胆・怒りなどの情感も含まれる（中略）ことは注意する必要がある。〈五八頁〉

この大鹿の定義は、先の小松の定義よりも詳細になっている。しかしここで重要なのは、小松によるものも大鹿によるものも、あくまで「どのような情意であるか」という点だけを示しているという点である。聞き手を意識しているのかしていないのか、あるいは、聞き手に伝えようとしているのかしていないのか、といった点は問題にされていない。

実際、前節で述べたように、聞き手を意識しているのかいないのかがはっきりしない例は、少なくない。つまり「詠嘆」の意味は、対話的性格が強いか独話的性格が強いか、といった問題とは異なる次元に存在するものと考えられるのである。

だとすれば、以下の例はすべて、カナが「詠嘆」の意味を表していると考えても問題がない。

⑭〔匂宮〕《ことことしきほどにはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかな》、といとあだなる御心は、《口惜しくてやみにし事》、とねたう思さるるままに、……。心内文〈浮舟、一八五九・二〉

⑮〔源氏〕「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」とひとりごちて、……。独話文〈賢木、三五七・八〉

⑯〔髭黒→式部卿宮〕「いと若々しき心地もしはべるかな。思ほし捨つまじき人々もはべれば、とのどかに思ひはべりける心の怠りを、かへすがへす聞こえてもやる方なし。……」会話文〈真木柱、

九五五・六〉

⒄〔薫→大君（消息）〕「思ひの外に心憂き御心かな。人もいかに思ひはべらん」と、御文にて聞えたまへり。消息文〈総角、一六〇一・一一〉

⒁は、浮舟を回想する匂宮の心内である。しかし、ただ思い出しているのではなく、「まめやかにをかし」という評価を交えて感慨にふけっている。その事は、直後の心内文で「口惜しくてやみにし事」とある事からも明らかである。⒂は、独話文である。源氏は若紫の筆跡を見て、その成長に感心している。⒃は、会話文である。髭黒大将が北の方に会いに来たのだが、義父・式部卿宮は、髭黒が玉鬘に執心しているのを知っているので会わせてくれない。それに対する髭黒の不満の言葉である。最後に⒄は、薫から大君への消息である。ここでは、自分に会ってくれない事への不満を述べている。このように、いずれの文種であっても情意は示されており、「詠嘆」の意味をカナが表しているという従来の解釈で問題はない。

同様の事は、本稿で対話的性格が強い例としたものにも言える。

⒅〔源氏→右近〕「げにあはれなりける事かな。年頃はいづくにか」〈玉鬘、七四三・九〉

源氏が右近から、行方のわからなくなっていた玉鬘を見出した事を聞き、それに対して応答したものである。右近の発言に対する応答である事から、対話的性格の強い例である事は間違いない。しかし「あはれなり」という評価の形容動詞だけでなく、副詞「げに」まで用いており、情意の動きが示された例であると考えられる。

⒆〔小侍従→柏木〕「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつけき事をも思しよりけるかな。何しに参りつらむ」と、はちぶく。〈若菜下、一一七四・八〉

この例は、女三宮にまた会わせるように求める柏木の発話に応答した、小侍従の発話である。したがって対話的性格

は強い例と考えられる。しかし、小侍従は柏木を「むくつけし」と評価している。しかも小侍従は、「はちぶく」、つまり口をとがらせて不満を言っているのである。やはり情意の動きは認められるであろう。

以上のように、「詠嘆」の意味は、対話的性格が強いか、独話的性格が強いかという問題とは異なる次元に存在しているものと考えられる。カナが「詠嘆」の意味を持つという従来の説明は、その点で正しいと言える。(4)

三・二　独話的なものと対話的なものを同時に表せるのはなぜか

カナの「詠嘆」の意味が対話的性格の強さとは無関係であると考えると、独話的性格の強い例と対話的性格の強い例との両方が見られるのはなぜかという問いに対する答えは、自明のものとなる。

つまり、対話的性格が強いか独話的性格が強いかというのは、文脈によって決定されるものであり、カナの持つ「詠嘆」の意味は、その点に関して積極的な影響を与えるものではないという事である。「詠嘆」の終助詞は独話的性格を持つと考えられがちであるが、以上の考察からは、そのような事実は認めがたい。

この事実は、古代語の終助詞の体系を考える際も重要である。現代語では、終助詞の種類によって、聞き手への伝達のしかたが大きく異なるとされる。このような終助詞は古代語にも見られ、ナやカシがそれに相当するとされる(森野崇：一九九〇、一九九二)。しかし、すでに述べたように、カナ終止文におけるカナは、聞き手への伝達のしかたに寄与しない。このような終助詞の外延については別途調査が必要だが、以上のような古代語と現代語との、終助詞体系の大きな違いはおさえておく必要があろう。

四　本稿の結論

本稿では、源氏物語における助詞カナについて、個々の例から得られる用法の問題を端緒として、助詞自体の意味の問題について考察した。その結果、

i　カナ終止文には、聞き手へ伝わる事を意識した、

対話的性格の強い例が見られる。こうした例は、カナ終止文のとる構文にかかわらず見られる。

ii　助詞カナの「詠嘆」の意味は、対話的性格が強いか独話的性格が強いかという問題とは異なる次元に存在する。カナ終止文が対話的性格の強い例になるか、独話的性格の強い例になるかは、助詞の意味ではなく、文脈によって規定されるものと考えられる。したがって、「詠嘆」の終助詞が使用されていても、その文が独話的性格の強いものになるとは限らない。この事は、聞き手への伝達の面で、現代語と古代語とで終助詞の体系が大きく異なる事を示している。

という二点が明らかになった。

このように、終助詞の問題を考える際には、具体的な用法と、そこから抽象化する事で得られる助詞の意味という二つのレベルに分けて考える事が必要であると思われる。

注

（1）「詠嘆」と「感動」とを分ける立場もある（小松光三：二〇〇一）が、両者の違いは本稿の考察に影響を与えるものではないため、「詠嘆」に一括して考察を行う。

（2）「　」の有無は、今泉忠義・森昇一・岡崎正繼編『源氏物語全』（桜楓社、一九七七年）に従う。このテキストは「首書源氏物語」を底本としているが、脚注に『源氏物語大成校異篇』本文との異同が示されている。そこで、脚注に基づいて置き換えたものを「　」の有無の判定に使用した。

（3）なお、問いかけや行為要求の表現がカナ終止文より後に見られる場合は、対話的性格が強い例の確例とは言えない。先にカナ終止文を独話的に用い、その後で聞き手の注意をひきつける言語行動をとったとも考えられるからである。

（4）無論、「詠嘆」の終助詞と呼ばれる助詞群の一つ一つに、何の差異もないと述べているわけではない。助詞ごとの構文上の違い、表現性の違いなど、検討すべき事は多い。しかし各助詞の意味に共通する側面として、「詠嘆」を認めるべきであると考えている。

参照した注釈書類

【大系】→日本古典文学大系（岩波書店）／【全集】→日本古典文学全集（小学館）／【今泉訳】→今泉忠義『源氏物語　現代語訳』（桜楓社）／【集成】→新潮日本古典集成／【玉上評釈】→玉上琢弥『源氏物語評釈』（角川書店）／【鑑賞と基礎知識】→『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂）／【新大系】→新日本古典文学大系（岩波書店）／【新編全集】→新編日本古典文学全集（小学館）

参考文献

大鹿薫久（二〇一四）「詠嘆」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店

小松光三（二〇〇一）「詠嘆」山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院

西田隆政（二〇一二）「「詠嘆」の終助詞「かな」再考―「源氏物語」を資料として―」『武蔵野文学』六〇集

――――（二〇一四）「中古和文の文体をめぐって」『文学史研究』五四集

森野崇（一九九〇）「古代日本語の終助詞「な」について」『秋草学園短期大学紀要』七集

――――（一九九二）「終助詞「かし」の機能」『辻村敏樹教授古稀記念　日本語史の諸問題』明治書院

【付記】本稿は平成二六年度國學院大學国語研究会前期大会で発表した内容を、加筆・修正したものである。席上、その他で貴重なご指摘、ご教示を賜った先生方、参加者の方々に御礼申し上げます。